
斬る！

皇 十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

斬る！

【Nコード】

N3857C

【作者名】

皇 十夜

【あらすじ】

今宵も、闇に断末魔が響く。自らの片割れを探しながら、女侍・香炎が闇を切り裂く！本業は侍。一族を皆殺しにした双子の兄を捜しながら陽光の下では一介の女中を演じている香炎だが……。女ながらに、侍である彼女の生き様をつづる。

序章

墨を流したような深闇の中、煌びやかな電灯がそこだけを染め抜いて闇を夜色に変色させている。

もちろん夜の街場に於いて、灯りは一つだけではない。

ここは東西南北に分かれているうちの一つ、北軍が治める街・虹蓮こうれん。この国の首都だ。

表通りには名うての大店や料亭が軒を連ねており、時の関係なく常に人が絶えず、繁華街として栄えている。

繁華街の喧噪が遙か遠くに聞こえてくる裏通り。

闇に沈んだ裏道をゆく影が一つあった。

建物の影から出た瞬間、辺りの残照にその人物の輪郭が浮かび上がる。

少年…いや、年の頃は十七か八ほどの、黒い衣を纏った少女だった。

少女ならば香料の一つも匂わせようが、彼女からは一切、そういう

た物を感じられない。

彼女が纏う香りは——— 血と硝煙。

戦場いくさばのものだ。

少女自身は仕事柄汚れるのは慣れていたし、元々の性さがから、今までそれを苦痛に感じたことはなかった。

しゅん、と音もなく白刃が振りかざされて、矢継ぎ早に相手の刀が弾かれる金属音が路地裏に響く。

「最後にもう一度聞く、あの男を知っているな？ どこにいる」

光宿す刃を突き付けられた男の喉から、ひっと短かな悲鳴が漏れた。「言え！」

少女にしてはひどく残酷な瞳が、男を威圧する。

「い、言っと思うかッ……仲間を売るくらいならば、貴様に斬られた方がマシだ！」

目の前で腰を抜かしている男は、少女と同じく侍姿。

「……仕方のない、ムダな殺生はしたくなかったのだがな」

「ヒイツ……」

ひゅん……と風を裂く小気味よい音がする。

夜の漆黒に重く冷たい刃が振り下ろされ、誰にも届かぬ断末魔が響いた。

出逢う！（前書き）

一族を自分一人残して殲滅した双子の兄・香月かづきを捜しながら、日中は料亭・鈴屋で女中を勤める香炎。

そんな香炎だが、ある日一人の侍と出会う。

どうも気に入られてしまったようで…？

出逢う！

それは、今から二月ふたつきほど前に遡る。

香炎が女中を勤める料亭・鈴屋にその男は客として現れた。

本当に、思いがけない…衝撃的な邂逅だった。

「香炎ちゃん、菊乃間にお膳一つお願いねーっ」

「はあい！」

栗色と萌葱の混ざった髪を揺らして、一人の女中が厨房へとまろんで行く。

年の頃は十代後半。

ほっそりとした、美しい少女だ。

「今日のお客様はどなた？」

「おや、珍しく知りたがりだねえ。あたしから伝えるより、実際に見に行ってきた方が早いよ」

ひよっこりと顔を出した『看板娘』に、女将はにこにこ穏やかな笑みを向ける。

「そ、それはそうですが…」

（教えてくれたって…）

ぶつ、と可愛らしく頬を膨らせた香炎に、女将は先とは違う上司の顔で告げた。

「早く行っておやり、その旦那ねえ…『天女』をご所望だよ」

「え、今時間からですか？」

『天女』が呼ばれるのは、いつもはもつと日が落ちてからのこと。日がある内に呼ばれるなど異例だ。

「ぼやばやしない、旦那がお待ちだよ」

やんわりと背を押されて、香炎は再び不服そうに唇を尖らせた。

「もう、分かりましたよ……行つて参ります」

ばたばたと廊下を戻つていく香炎を見送つて、女将は『まだ若い若い』と肩をすくめる。

それは、どこか楽しそうにも見えた。

天女、とは香炎の異名。

神懸かった造作の彼女にいつの間にかつけられ、広まってしまったいわゆる通り名みたいなものである。

それに、香炎がそこまで執拗に尋ねたのには訳があったのだ。

犬が、悪臭を防ぐすべを知っているように。

他より鋭敏な神経を持つ香炎は本能的な危機を感じ、数日前から身構えていたのである。

「失礼致します、膳をお持ち致しました……」

「ああ、忝かたじけない」

目が合った瞬間、香炎は全身が勦あわ立つのを感じた。

（こ……この男!?）

刀を佩はいている彼は、どこから見ても侍。

彼からは、自分と同じ気配がする。

『侍』独特の、重々しい気配。

（——やはり、当たった。侍が来る気配がしたんだ）

ここで一つ説明しておこう。

香炎の本業は侍だ。

無所属の傭兵といったところか。

女中の仕事は、昼間の仮の姿。

だが香炎は、この仕事が嫌いではない。

簡素な理由を言うならば、情報を聞き出すにはこれ程まで理にかなった職はないからだ。

凡て計算ずくだが、香炎はこの仕事が楽しかった。

「ん……どうした？ なにかまだ所用でも？」

「あの……天女』をご所望、と聞いて参ったのですが……」

侍に見とれていた香炎は、彼の問い掛けに言葉通り飛び上がった。もう。

「ああ、部下に『いいから見に行ってみろ』と急かされてな…余りに煩いものだから辻褄合わせに一目…と」

「まあ…」

（な—んだ、このおっさん物見だけか。ホッ）

「やはり…噂に違わぬのだな」

「はい？」

「いや…どうも女子おなを褒めるのは苦手だな」

ふわりと首を傾げた香炎に、侍は頬染めて口ごもる。

料理と他愛ない話を交えているうちに、一刻がすぎた。

ここ、鈴屋は時間制なのだ。

「そろそろ、時間ですわね…」

「……そうか、早いものだ」

二人はなにも言わずに、暫ししば見つめ合ったまま動きを止める。

沈黙を破り、始めに切り出したのは香炎の方だった。

「あ…そろそろお送りしますね。…こちらへ」

「いや待て…」

「あつ」

手首を捕まれ、香炎の体温が上がった。

穏やかな琥珀色の瞳が、香炎を捕らえて離さない。

検分するようにじっと見つめられて、香炎は居心地悪そうに赤面した。

「な、なに…か？」

「お主、よい目をしているな…」

「は、はあ…」

（何だろう、この感じ？ 吸い寄せられる……）

「お主、名は？」

「……香炎、と申します」

（はっ！ なに、このオッサン、いきなり口説き！？ でも、でも…いい男）

「香炎か…お主に似合いの、その……」

「はい？」

「……よい名だな」

俯いたまま告げる彼の顔は、これでもか…というくらいに赤くなっている。

（この人…素直な人だなあ。殿方でも、珍しい誠実な方）

香炎は、初めて逢った『侍』の彼に興味を持った。

「あの、そろそろ離していただけますか…？ 戻らないと、怪しまれます」

「あ、ああ…そうか。引き留めてしまつて済まない」

「いえ……」

握っていた手首を離してしまつてから、彼は名残惜しげに温もりの残る手を握りしめた。

香炎はそそくさと礼を取つて、部屋を出ようとした。

「和隆かずたかという、儂の名だ。覚えておいてくれ」

「……はい」

和隆を見送つた後、香炎は急激な不安に襲われた。

—— 見透かすような目だつた。

廊下の途中で、香炎は未だ静まらぬ動悸を必死に押さえる。

このまま戻つたら、確実に周囲の迷惑になるだろう。

「どうしよう…」

もしかしたら、あの時に正体を見破られてしまつたかもしれない。真偽は解らないが、警戒するに越したことはないだろう。

（冗談じゃない）

ほか、特に男連中に正体がばれた時は本当に碌ろくな事がないのだ。

大方の男は同情する素振りを見せて付け入り、情報料——つまり体

を求めてくるのが常。
勿論、その場合は思い切り撃退している。
弱いだけの女ではない。

料亭・鈴屋の厨房で、食器を片づけながら香炎は深々と溜息した。
その眉間には溪谷並みの皺が寄っている。

「あら、怖い顔。先刻のお侍様がどうかした？」

和隆のことばかり気にして上の空だった香炎は、急に話をふられて
ぎくりと肩を跳ねさせた。

「えっ……いいえ、少し、気になっただけです」

洗い物をしている隣で、女将が楽しそうに聞いてくる。

（触れられた手首……熱い。どうしたんだ……あたし）

あの男——自分と10、いや20は離れているだろうか？

すっかりとした中にも鋭さを感じさせる、歴戦の侍の雰囲気だ。

褐色の肌…焦げ茶色の髪に、鳶色の瞳。

（もっと触れて欲しかった）

など思った自分が呪わしいが、本心なので仕方ない。

多分、同業に思いがけず出逢って嬉しかったのだろう。

（もう、本当にどうしたんだ）

未だ、揺れ動く思いがもどかしくて堪らない。

『恋』なんか知らない。

いや、知らなくていい。

自分は『侍』なのだから。
あたし

自分は女であり、女ではない。

『あの時』にそう誓っただろう。

自分の志に色恋など無用。

知ってしまったら、どうなるかなど明白だ。

（でも、離れたくないと思ったのは……なぜ？）

世間的に言う、これが一目惚れというやつなのだろうか？

（いけない…）

解っている。

それは、知ってはいけない禁忌^{タブー}。

自分は『目的』ただ一つのためだけに生きている。

無用な感情など、持つべきではないと言っことを。

終勤後、窓枠に腰掛けた香炎は和隆が帰っていった方角をいつまでも朦^{ぼん}つと見つめていた。

どこからか『あれは絶対に恋煩いだわ』とからかう声があったが、香炎本人には届いていなかった。

出逢う！弐（前書き）

怨敵・香月を捜していた香炎は、暮れ時に鈴屋に来た侍・和隆と邂逅する。

和隆は香炎を見初めてしまい…？

出逢う！貳

「さて…」

小高い丘の上。一つの影が、微かな声で呟いた。

薄墨色の雲間から、月光がその足元を明々と照らす。

がりりと、靴裏が細かな砂利を踏む音がした。

闇の中から爪先が覗く。現れたのは一人の若侍だ。

月光に透ける色味の薄い髪を高く一つに結び、漆黒の着物を着流しにして、腰には見事な業物を佩^はいている。

ほっそりとした立ち姿が美しいこの若侍は、街を一望できるこの丘で時々休むのだ。

生暖かい夜風が、隠れていた月を押し出してひと思いに辺りを照らし出す。

月光に輪郭が浮かび上がり、侍の素顔が明らかとなった。

「何だ、今日は上弦だったか。読み違えたな…」

呟いた若侍は、香炎の顔。

——否、若侍は香炎その人であった。

香炎は、毎晩捜しているのだ。

家族を——香炎のみを除いて、一族を殲滅した自らの片割れを。

「香月^{かつぎ}…っ！」

双子の兄、香月は一族の中でも統率力・能力共に一目置かれる存在だった。

『だった』のだ。

模範的な兄を、香炎はとても誇らしく思っていた。

だが、惨劇はある日突然襲い掛かる。

「見つけて討ち果たすまで、死ぬわけにはゆかぬ…」

惨劇の日、同胞の血を浴びて嗤^{わら}っていた鬼を討ち果たすまで。
ぎりりと、噛み締められた香炎の唇が色を褪^{たい}して白くなる。

「先客がおったとはな。…お主も月見か？」

覚えのある声に、香炎は覆面を引き上げて距離を取る。

「……！」

三步ほど間の開いた先には、昼間鈴屋に來た侍・和隆が佇んでいた。
香炎の目が、一瞬だけ大きく張られる。

（和隆…さま？ そうか、彼は軍部所属の侍。ふうーん…）

「そう、警戒するな…敵意はない」

いつの間にか距離は縮まって、半歩ほどしかない。

目前に來た和隆は、昼間見た時とは違う褐色の軍服を纏っていた。

「儂は島津和隆と申す。お主は？」

「香炎…。杣崎^{そまざき}、香炎^{かえん}」

に、と笑った和隆を瞬時に察して、香炎は二歩、三步飛び退く。

然し、察しのいい軍人にはしっかりと正体を見極められていた。

「香、炎？ お主、昼間に鈴屋にいた女中か…」

「…っ」

殺気の籠もった冷たい風が、二人の間を吹き抜けていく。

「答えぬところを見ると、そうなのだな…」

「だったら、どうしたというのです…？」

鋭く見返す香炎の目に、和隆は僅かに息を詰めた。

「やはりな」

「…え？」

「お主の目は、どうも他の女の目とは違う…。もう一度逢いたいと思っていたところを、早それが叶うとは」

顎髭を撫でながら笑う和隆に、香炎は身構えたまま固まってしまった。

（あたしに逢いたい…と？）

「なぜ？」

「昼間お主に逢った時、同じものを感じたからだ。それは…抑えて

いても、解る者には解る」

（凄い……！！　やはり、この男は本物！）

香炎は覆面を下げると、素顔で和隆を見た。そして跪く。

「…某、貴殿に弟子入りを志願したい」

和隆は小さく溜息をした。表情には、困惑と哀しみが緋い交ぜになっている。

「……顔を上げてくれ」

「是は」

貌をあげた香炎は、きりりと背筋を正して和隆を見上げた。

「儂は、弟子を取る気はない……。だが」

「え……」

「お主を見初めた」

香炎のその表情が、一瞬の内に落胆から驚愕のものに変わった。

「見初め……た？」

（それ、どういう意味？）

（サムライ
同志として？）

それとも、女……として？

「昼にも言ったが、儂は……女子の扱いが解らんのだ。その、な？

まずは友になつてはくれぬか？」

香炎は、和隆の顔をちらと盗み見る。

急にしどろもどろになった和隆の顔は、想像したとおりやはり赤面していた。

「友……ですか、あたしと」

「嫌か？」

内心で、和隆の言葉を反芻する。

意味合いとしては、どうやら後者のようだ。

「……こちらこそ、頼みますね」

暫しの沈黙の後、香炎は消え入りそうな声音で返事を返した。

出逢う！貳（後書き）

こんにちは、銀流です。

おっさま侍・和隆と香炎（謎多し）の間に生じた、微妙な感情。

この先どうなるのか、生暖かく見守っていただけると幸いですね。

ぶつかる！（前書き）

昼間は料亭・鈴屋で女中を勤める香炎。

とある日の夜、使いで遅くなった香炎は裏道で一人の若侍に斬りかかられてしまい…！？

ぶつかる！

一瞬、月光を含んだ白刃が閃いた。
紛う事なき殺気に、香炎は常に腿に備えていたあいくち匕首に似た暗器を抜いてその場から飛び退く。

——ガキイン！

夜闇に、剣戟が噛み合う音と火花が散った。
押す力は強いが、太刀筋は酷くぶれている。つまるところ、力任せに刀を振るっているに過ぎない。

「貴様ツ……なぜ刃を向けるか！」

いま、手許に愛刀はない。香炎は、懐刀で辛うじて男の攻撃を防いでいた。

（この調子だと、どうにも塩梅あんばいが悪い）

今は隣町への使いの帰り。攻撃に応じはしたものの…普段着のまま動けば、間違いなく返り血を浴びてしまう。

そうなれば騒ぎが起きると共に、正体露見にもつながってしまうだろう。

尚更、この男を斬る訳にはいかなかった。

「お前からは……血の香がするっ」

斬りかかる男は、存外に若い声で応えると身軽く間合いを取った。

「く……」

「お前、その動き……。ただの女ではないな？ 侍か」

「だったらどうした」

「久々に珍しいモノを見たなあ、女侍か……」

香炎は男から殺気が消えたのを悟ると、恨みがましい眼差しを投げつけた。

「用がないのなら…帰らせてもらおうか」

「あ、いや…待ってくれ！ 某は北軍の副官・島津将忠しまつゆきただと申す。そなたは強い、是が非にも我が軍に御同行願えはしないだろうか」

男、というより少年は香炎を暫し見つめた後で突然頭を下げた。
（な、なっ…こいつ、ただのスカウト！？）↑（香月の手の者かと思った）

愕おどろくと同時に、沸々と湧き上がる怒りの熱を感じ、香炎は拳を握りしめた。

ぐぎゅう…と擬音がしそうな位に強く握りしめた掌に、深く爪が食い込んだ。

「貴様ああ…紛らわしい事するんじゃない——い！」

「ふぎゃ！」

ごつ、という何とも嫌な音と、少年の悲鳴が夜の静寂しじまを一頻りに乱した。

「まったく、擦れ違い様に斬りつけてくるなんて。なに考えてるんですか……」

場所変わり、どこの住み込み女中にも与えられる一軒の離れ。

裏道で斬りかかった（香炎の認識では、じゃれてきた事になっている）てきた少年・将忠の鼻柱に絆創膏を貼ってやりながら、香炎は大仰に溜息する。

使いで隣町までの所用を済ませた帰り、出掛けからしていた嫌な予感が的中。

帰り道で、この少年に斬りかかられたのだ。

腐っても軍人なんだろう。（将忠に失礼）

おまけに、正体まで見破られ大損害を被った。

（まあ、喋らせさえしなければ…ばれることはあるまいよ。もしも
の時は…）

「いや済まない。この時勢で、久々に骨のある気配に……つい、な」

「つい、って……それでもし違ったら、ただの人殺しでしょう！」

自分と大して年格好の変わらない少年に、香炎は怒りも露わに刺々

しい口調で非難する。

（確か、こいつも軍所属の侍だつて言つてたけど、和隆様とは大違いよね。島津将忠つて言つたつけ……あれ、どこかで聞いた名前）
「いや、違わない。現にお前の正体も当てただろう」

「（こいつ、開き直つて！）でも、もしもって場合があります！」
フイと背を向けた少女に、将忠は困つた顔で頬を掻く。

「済まぬと言つているだろう？ どうすればお主は許してくれるのだ。何でもする、さあ言つて見ろ」

なぜか和隆と面影が重なつて見え、香炎はぱちくりと瞠目してしまふ。

「何でも？」

こつくりと首を傾げる姿が、容姿とも相俟つて香炎を際立たせた。その仕種が可愛らしくて、将忠は一瞬で釘付けになる。

「じゃあ、甘味が食べたい……。明日『てまり』で甘味が食べたいな。何でもいいのよね？」

ちなみに『てまり』とは、虹蓮で知らぬ者は居ないほど有名な甘味の専門店だ。

異国風に造られた庭園で、茶と甘味を愉しむことができる。

「あ、ああ……別にいいが。だが、普通そういう場所は好いた奴と行くのではないか？」

好いた奴、という言葉について和隆を思いだして香炎は赤面してしまった。

（だつて和隆さま……。最近仕事が忙しいみたいで、軒先にもいらっしやらないし。逢えない日、これで10日越えた……）

和隆との間の壁が次第に薄まりつつある……そう思っていたのは、どうやら自分だけだったらしい。

突然、軒先にも現れなくなった。

「どうやら、いるみたいだが？」

「なっ、からかわないでくださいな！」

ニヤリとした将忠に、香炎は思い切り噛みつくが彼はどこ吹く風。

「ははは……明日な。明日は昼でいいか？ 店の前で落ち合うぞ」

「もうっ……何からなにまで勝手な人っ」

「おい、どこ行く……」

将忠は、とことこと奥に入っていった香炎を首を伸ばして見た。

香炎は電熱器の前で水を注いでいる。

「どうやら茶を入れていようだ、乗せられた茶器から瞬時に湯気が上がった。」

「おい、そういえばお前の名前……訊いてなかったと思うんだが」

「そうでした？ 杣崎といいます。以後……お見知りおきを」

煎茶を注ぎながらおざなりな返事をする香炎に、将忠は『嫌われたかな』と苦笑い。

「俺が知りたいのは名の方だ。名字じゃない……愛想のない奴め」

「……香炎。杣崎香炎、覚えましたかっ？」

「香の炎……気の強いお前に、似合いの名だな。茶が入ったか」

（腕の立つ女侍か、兄上にも逢わせてやりいな。即戦力決定だ）

「……どうぞ」

「ふーん……もうちょっと、愛想があれば受けもよいと思うんだがなあ」

「要りませんよそんなものッ」

「いででで、こら引つ張るな……はねつかえり」

帰っていく将忠の後ろ姿に舌を出して、香炎は勢いよく戸口を閉める。

秋も終わりの、張りつめた外気がぴりりと頬を灼いて、香炎は無意識に両手で頬を覆った。

「和隆さま……」

（おかしな男に会ってしまいましたよ。早く、貴方に逢いたいです）
「何を、考えているんだ……あたしは」

女としての幸せが望めないのは、承知の筈。

なのに、それを切に望んでいる自分がいる。

「分かっているのに……分かっているのに、止められない。ダメなの」

胸元を、きつく握りしめる香炎。

その目には、大粒の涙を湛えていた。

瞬間毎の、和隆の顔が香炎の脳裏にちらついては消えていく。

穏やかな、鳶色の瞳。

低めの、心地よく響く声。

「ああ……こんなにも……」

（どうしても、貴男あなたの前では『女』になってしまう。愚かな私を許して）

和隆への溢れる想いを抱いて、香炎は床に就いた。

ぶつかる！（後書き）

こんばは、銀流です。

『斬る！』をお届けにあがりました。

今回、初登場の若侍・将忠。

香炎とは…あんまり仲がよくないようです。

（まあ、いきなり斬りかかってきたのでおぼえが宜しくない）

犬猿の仲というか、いやそれ以上のハブとマングースでしょうかね…。

こんな話ですが、生ぬるゝい目で見守って戴ければ幸いです。

誓う！（前書き）

裏道で斬りかかってきた若侍・将忠は、和隆の歳の離れた実弟という事が判明！

香炎はその謝罪に、彼に何でも言うことを訊いて貰うという条件をだした。

逢えず、ストレスが溜まりつつあった二人は、遂に10日ぶりの逢瀬を果たす。

親子ほども（外見的に）年の離れた二人の恋の行方は……！？

誓う！

「将忠か……」

知った気配を感じて、自室兼執務室の机に向かっていた和隆は、ドアに凭れ掛かる雲隠れしていた部下を一瞥する。

「怒ってます？ その様子だと……」

「分かっているなら訊くな」

将忠——島津将忠は、和隆の歳の離れた実弟であった。北軍の指揮官である兄の傍ら、参謀を務めている。

「どこに行っていた、酒臭い……このような事態に不謹慎だと思わぬか」

和隆を筆頭として統括される北軍は、駐屯地である北方地域を治めているのだが昨今、他軍に不穏な動きがあるので『草』に動向を探らせている最中なのだ。

いわゆる緊急配備、警戒態勢である。

そのせいで愛しの香炎にも逢えず、和隆はストレスを感じつつあった。

「まあ、そう怒らず。今日はいいい人材を見つけてましてね。北軍に引き留められれば即戦力になる」

「またお主の『拾い癖』か」

弟の拾い癖は毎度のことなので、和隆も適当にあしらおうとした。だが次の言葉に、和隆は将忠を思いきり睨み付けた。

「元気のいい牝鹿を見つけた。女侍ですよ……珍しいでしょう？」

「香炎！？」

「知ってたんですか……。兄上も気に入りますよ、絶対」

「よせ、その女侍には手を出すな……儂が許さぬ。無論、何もしてはおらぬな？」

「…小手調べに、と思って少しつつただけだ。何、怒ってるんですか」

「む…っ」

痛いところを突かれてそれきり押し黙ってしまった兄に、将忠は唐突に合点して妖笑を浮かべる。

（嫉妬してるのかな…？）

「明日の正午、香炎と約束がありましたね。良ければ兄上も一緒にどうです？」

一瞬、和隆の表情が驚愕のものに変わる。だがすぐに、深い溜息と共に始めと同じ顰め面になった。

「いや……悪いがお主一人で行ってくれ。まだ、こちらの手が離れぬのでな」

「左様で…」

（後で後悔しても遅いぞ…兄上。香炎は俺がもらっ）

その興味本位が後にどんな波乱を招くかも考えず。香炎が兄の想い人だと言うことを知った将忠は、彼女を奪ってやろうと内心で目論見をした。

早朝、いつも通りに香炎は庭の井戸から水を汲んでいた。

まだ夜も明けきらない、空が仄青く見えるこの時間帯が香炎は好きだった。

凍った大地を踏みしめる足裏で、霜柱が脆く碎ける音が少し小気味よい。

朝早くに現れる和隆に出す朝食を作るのが、一日の始まりだ。^{しか}然し、最近はどういう訳かこない日が10日ほど続いていた。だが、作るのをやめようとは思わない。

健気だ、などと思うのもおこがましいが…作り続けていれば、その内に和隆に逢える気がした。

「寒い……薪、もう少し足そうかな」

暖炉の前で凍水に紅く爛れた手を擦り合わせては、息を吹きかける。冷えた手は、そう簡単には暖かくはならない。

彼が来てくれることだけを思っ、香炎は強く拳を握りしめた。

と――寒さに身を震わせた時、香炎は確かに戸口を叩く音を聞いた。

（もしかして……！）

戸口を叩く音に戸を開ける。然し、誰も来てはいなかった。

今までに、そんなことはたくさんあったのだ。

また風でも吹いたのだろうと諦め混じりに戸に触れた瞬間、待ちわびた声が耳朵を打つ。

「香炎、早朝に済まぬ……儂だ」

「和隆さま！？ 待って、いま開けますからっ」

「ああ」

戸口を開くと、肩にうつすらと雪を積もらせた和隆が佇んでいた。

「お入りくださいな、お茶、淹れて来ますね」

暖炉がある居間に和隆を案内した香炎は、台所へと踏み出した瞬間動けなくなった。

「香炎……」

背中を向けようとした香炎を、和隆が抱き竦めたのだ。

「あつ……和隆、さま」

香炎の柔肌の頬が、急速に赤みを帯びた。

触れ合ったことは幾度か合ったが、こんな風に抱かれるのは初めてのことだ。

気のせいなのか、どうなのか。和隆の鼓動も、早く感じる。

「どうしても、お主に逢いたくて出てきてしまった……」

「う、嬉しい……。ずっと、ずっとお逢いしたかったですよ。いつも朝餉を作って待っていたのに……。10日もいらっしやらないんで

すもの…とても、寂しかった」

小刻みに震えて俯いてしまった香炎に、和隆は頬を緩める。

「儂とてこの10日間…辛かったぞ。お主に逢えぬのが苦痛で、出てきてしまうほどだ」

「和隆さま…あ、あの、薬缶ヤカンが…お湯が沸いてますわ。止めない
と」

ころころと、薬缶が湯気を上げて沸騰している。

「いま暫し…」

「和隆さま。…んっ」

その向こうで二人は、10日ぶりの温もりと初めての接吻キスを交わしていた。

「愚弟が迷惑をかけたようだな…済まない」

「お気になさらずに…。やはり、弟御でしたのね。真っ直ぐな眼差しに『もしや』とは思いましたけれど」

（それ以外にも、たくさんあるけどね）

「今日、奴と会うそうだな…？」

辛そうに言う和隆に、香炎は満面の笑みを咲かせた。

「あたしが善よしとする方は…和隆さま只一人なのですからね？ 心配要りませんよ」

和隆の膳を運んできた香炎が、傍に座る。

だが、和隆は浮かない顔。

「あら…。信じてくださいませんの？」

「あ…いや」

「眉間に皺が寄ってます」

無邪気に微笑みながら人差し指を押し当てる香炎に、和隆は照れながら小さく唸るように言った。

「…くれぐれも油断するでないぞ。奴は手が早い」

「心配性。もう…和隆様、こっち向いてくださいな」

和隆の目が爆ぜんばかりに見張られ、手にしていた箸がかしゃんと

床に転がった。

「か、香炎！？」

そつと唇に触れた柔らかな熱に、和隆の心臓は一気にパンク寸前まで跳ね上がってしまった。

「これがその証…。信じてくださいますね？」

「あ、ああ…」

「よかった」

年甲斐もなくなるときめいてしまい、和隆は浅黒い顔を真っ赤にしたのだった。

誓う！（後書き）

こんにちは、銀流です。

『斬る！』5話のお届けにあがりました。

漸く逢うことができた和隆と香炎。

しかし！ またもや将忠が何かもくろんでいるようです。（いや、

目論ませたのは自分だけと…）

さてさてどうなる？

打ち込まれた楔

（ふむ、やはり美人だ。ジジイな兄上には大分勿体ない気がする……）

将忠は、幸せそうに甘味を頬張る香炎に見惚れながら物思いに耽っていた。

（美人で気だても良さそうなのに……何で、侍の兄上^{くんじん}なんかと一緒にいるんだ？ って、かく言う俺も侍^侍なだけどね）
と、ぜんざいを頬張っていた香炎が徐に口を開いた。

「ねえ、ずっと気になってたんだけど……食べないの？」

将忠の前には、抹茶のアイスクリーム。

だが既に溶けきっており、匙が浸って何とも情けない様相を呈している。

「ああ、お主に見惚れて、すっかり忘れていた……」

「まあ……」

（場に合わせて）につこりと愛想笑う香炎だが、目の前の将忠にはそれが分かっている。

まあ、別に分からなくてもいいが、そういうタイプの男は特に扱いづらくて嫌いだ。

（お世辞も休み休み言いなさいな……全く、これだから子供は）

「それで、何ですか？ その『お話』とは」

香炎は、ひやりとしたイヤな予感を察して居住まいを整えた。

この、見掛けに違わず軽い男のことだ。どうせ碌^{ろく}な話ではないだろう。

神妙な表情で居住まいを正し——将忠は言った。

「香炎殿、どうか私とお付き合い願えないでしょうか？」

「……ええ？」

些か態^{わざ}とらしく、驚いたフリ。

周囲には、突然話を振られて驚いているように見えることだろう。

（ほーら、やっぱりね。知った上での事だから、なおさら質の悪い）

「それは、できません」

「それは無理というものだ」

不意に重なった二つの声に、出端を挫かれた将忠は”ズベッ”と盛大にずっこけた。

「くっ、やはり来ましたか兄上……有りもしない会議などと嘘をついてまで、私を見張っていたんですねッ！」

恨みがましく喰ってかかる将忠に、和隆は『嘘などと人聞きの悪い』と肩をすくめて見せたのだった。

「いや、何……香炎が心配でな」

「和隆さま……？」

さり気なく肩を抱いて、和隆は香炎を胸板に引き寄せる。

「油断をするなど、言っていたであろう……全くお主は」

そして耳元で、どこか艶を含んだ声音で香炎を諷めた。

項に息がかかり、ぞくりと肌が粟立っていく感触を、香炎は刹那だけ目を閉じてやり過ごした。

「和隆さまこそ……私も、もう10やそこらの子供ではないのだから、心配しすぎですよ」

端から見れば仲のよい父娘に見えるのだが、実際はかなり微妙で曖昧な関係の二人。

親子でもなければ、恋人でもない。今のところは、単なる友人だ。いい雰囲気になりかけていた二人を、将忠の毒入り咳払いが叩き割る。

「まったく、冗談じゃない。……ほら、兄上もいつまで香炎にひっついてるんです。今は俺と彼女の時間なんですよ？ 邪魔しないでいただきたい」

呆ける香炎を奪い取って、将忠は兄を強く睨めつけた。

「あ、あの……私困ります、もう決めた方がいるので……」

漸く合点した香炎は将忠の腕から逃れようと藻掻くが、少年の細腕の割に、意外と力強い力で引き戻されてしまう。

「では、お二人に訊きたいのですが……一体、お互いをどう思っているんでしょうかね？」

「む……っ！」

「それは……」

同時に口をつぐんだ二人に薄ら笑いを浮かべながら、将忠は思いきり深く楔を打ち込んだ。

それが、結局は二人の絆をより強く結ばせるとも知らず……。まだ若く浮ついた将忠には、『想い』の繊細さが理解できていなかった。

（「『どう思っている？』 そんな事、他人に言われなくとも心は
こたえ
とうに決まっている。つくづく愚問だな」）

「私（儂）たちは……誰よりお互いを信じ、愛している」

「なっ！」

揃い踏みして告げられた答えに、将忠は思わず息を呑んだ。

和隆は香炎を抱き寄せると微笑み、香炎もまた穏やかに微笑み返した。

その様子の、なんと自然な事だろうか。

「どうしてだ、香炎……年の近い俺を差し置いて、なぜ年増の兄上
なんか選ぶんだ……」

「これ、一言余計だ」

「いで！ いでーでででッ」

安堵の息をつく香炎の脇で、将忠は最後まで言葉を紡ぐことなく後ろ襟をつまみ上げられ藻掻いている。

「人の物を横から掠め取るうなどと。儂は育て方を間違っていたよう
うだ……お主にはまず、仕置が必要とみえる」

ぎろりと殺気も露わな隻眼で睨まれた将忠は、ぎゃっ！と短く悲鳴を上げて小さくなった。

「香炎、笑ってないで助けてくれよぉ！」

くすくす嗤う香炎に、背中を抓まれたまま可細く情けない声で訴える将忠だが、無視される。

「なりません、身から出た錆でしょう。自分で解決なさいな」

「そんなあぁ……」

「将忠、僕は用ができた。副官であるお主が、責任を持って書類を届けてくれ」

”責任”の箇所が強調されたような気がしたが、この際、気のせいにしておこう。

香炎は気づかれないように、再び嗤った。

「な、なぜ俺が!？」

「イヤか？ 今日のツケだと思えば、軽いものだろ」

「う……承知」

すぐごと去っていく将忠が見えなくなってから、和隆は香炎を抱き寄せた。

「お主の言葉、嬉しかったぞ。疑った訳ではないが……応えが言われるまでひどく不安だな」「それは、私も同じですよ。どうなるのか、とても不安でした」

和隆の胸に添っている香炎の肩に、桜花さくらの花弁はなびらが風に運ばれて漂着する。

その薄桃色の花弁はなびらに唇を寄せると、和隆が不満げに咳払いした。

「桜花……咲いているんですね」

「ああ、この先の河川敷にな。見たいか？」

「ええ、是非に」

二人は、河川敷を目指して櫟けやきの並木道を歩いていく。

時折、吹き付ける風が花弁を伴って二人を誘った。

「きれい……」

はらはらりと舞う桜の下。二人は何か誘われるように、どちらからともなく唇を通わせた。

口唇を離し、照れ臭そうに微笑む二人は漸く友達以上恋人未満に昇格した、というところだろうか。

初々しい再びの口づけに、香炎も和隆も酔いしれていた。

「桜は……潔い花ですね。風が吹けば散ってしまいますのに」

「まるで、お主のようだな。女としての生き方を求めず、侍として生きる」

「和隆さま……」

（買いかぶりすぎです……わたし香炎とて女。愛しい貴男あなたと添い遂げる夢を幾度見た事か）

ならば、いま見ている『夢』が永遠に醒めない事を願うばかりです。
春の白昼夢よ、どうかこのまま醒めないで——…

「香炎？」

「少し、少しだけ……このままでいさせて」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3857c/>

斬る！

2011年1月28日03時26分発行